

「青少年の心の闇と親子関係」 - なぜ親を殺すの? - 片田 珠美



プロフィール

大阪大学医学部卒、京都大学大学院博士課程終了、パリ第八大学留学。専門は精神医学、精神分析、精神科医として臨床に携わりつつ、精神分析的視点から精神疾患の構造について研究。現在、神戸親和女子大学教授。著書に『17歳のころ』『薬でうつは治るのか?』『こんな子どもが親を殺す』『やめたくてもやめられない - 依存症の時代』等多数

はじめに

初めまして片田 珠美です。宜しくお願いします。ちょうど三年前に本日と同じような公開講座でお話した際、主に「17歳のころ」(片田 珠美著)という本にもとづいて講演させていただきました。また2003年9月には日本経済新聞が同書を書評で「自己愛的万能感」をキーワードに取り上げています。この「自己愛的万能感」についてはまた後ほど述べさせていただきますが、当時「17歳」ということもキーワードになっていました。なぜ、この17歳がキーワードになったかということ、2000年に17歳位の少年達による殺人事件をはじめとする凶悪犯罪が次々発生したからです。5月に愛知県の豊川市で17歳の少年が人を殺す経験をしたかったということで全く面識のない60代の主婦を殺しました。その数日後には「ひきこもり」の17歳の男の子が、精神科の病院に強制的に入院させられたことに恨みを抱いていたため、従順な態度を装って、外泊の許可をもらい、自宅に帰った後、こっそり抜け出し、佐賀の高速バスをバスジャックしています。そして主婦を殺害したのです。

それからしばらくして、6月に、同じく17歳の高3で野球部にいた男の子が、下級生からのイジメに耐えられなくなって、その下級生を殺すつもりで金属バットで殴ったのです。自分は殺人犯になったと思った彼は、「殺人犯を子に持つ母親は可愛そうな存在だ。またそのような母親を見るのは自分も悲しい」という思いから、自転車で自宅に帰り、金属バットでお母さんも殺したのです。また、15歳の男の子が近所の同世代の女の子の入浴中に覗いたという疑いをかけられ、やってないと主張したのですが、このことで女の子の家に恨みを抱き、夜中の2時頃その家に忍び込み家族6人を次々にメッタ刺しにし、4人を殺害しています。

2000年にこのような事件が次々と発生したので「17歳」

という言葉がキーワードになったのです。なぜこのことがセンセーショナルに報じられたかということ、この3年前の1997年ちょうど今から10年前、「14歳」という言葉がキーワードになっていたからです。皆さんよく覚えていらっしゃる「酒鬼薔薇事件」、神戸の中学校3年生の男の子が自分の弟の遊び友達である小学6年生の男の子を殺害し、切断した彼の首を自分が通っている中学校の校門に置いたという事件です。この年代の少年達は凶悪犯罪を起こしやすく、さらに特徴として、なぜ彼らが殺人を犯したのか、動機が一見理解できないようなところがあります。そこで「動機なき殺人」と言われています。この17歳位の少年の犯罪をマスメディアなども取り上げており、これらの犯罪の特徴として、凶悪化 低年齢化 動機なき殺人の3つを挙げています。そこで2003年に私は「17歳のころ」という本を出したのですが、それから4年経った今、明らかに2003年当時とは傾向が変わってきています。どういう風に変わってきているかということ、2003年当時は「攻撃性がまだ外向き」(たとえば知らない他人を殺すようなこと)でした。ひるがえって最近の事件を見ても「攻撃性が内向き」になってきています。したがって、明らかに家族殺人が増えてきています。それは殺人事件の中での割合も増えているし、実数も増えています。例示すれば、親殺し、夫殺し、妻殺し、もちろん子殺しもあります。攻撃性が明らかに内向きになった、これが非常に大きな特徴です。少年達の攻撃対象は家族、主として親ということになります。

奈良の事件

昨年は親殺しが非常に目立った年です。そのような子どもたちを分析したのが「こんな子どもが親を殺す」という本です。親殺しの事例のみを題材に取り上げています。この本の書評(東京新聞19年2月1日夕)にも書かれているように「親の期待や過干渉に追いつめられながら、親から逃げ出すことはせず、殺すという選択肢に向かう」というのが特徴的です。すなわち、どの子も親に反抗することができない、ある意味ではいい子なわけですが、ある時期までは優等生.....

そして家出をすることもできないのです。たとえば、今話題になっている奈良の放火殺人事件の男の子、彼もスパルタ教育の非常に教育熱心な父親から逃げ出したいと思っていたのですが、結局逃げ出せなかったのです。家に火を点けて、義理の母親と弟、妹を殺害した後でな

ければ、家を出て京都に行くこともできなかったのです。今の子どもの特徴は、家出もできない 反抗もできない 家に閉じこもり、悶々としている、そしてあるときにキレて不満を親に向けるというものです。(事件の詳細については略)

後で彼がこの事件の動機について語っていることは、父から成績のことについて叱られた、前日にも父を殺そうと思った、医者になれというプレッシャー・重圧に耐えられなかった、などです。

ただ、ここで重要なことは、先述しました通り、彼は反抗していないのです。火を点けて家を燃やすまでは家出もできなかったのです。これが今の少年達の特徴ですね。すなわち、反抗も、家出もできない、その中で家において家族に対する怒り・憎しみを募らせていき、あるとき、場合によっては攻撃的な形で爆発させるというような特徴があるのです。

阪大生の事件

その次に、もう一人昨年、優秀な学生、阪大の工学部に在学中の青年ですね... 母親を殺した事件がありました。実は、彼は一浪しており、そして三年留年してなかなか卒業の目途も立っていない状態でした。なぜ彼が三年も留年することになったかというパチンコにのめり込む、いわゆる「パチンコ依存症」というような状態になっていたからです。

彼がなぜ母親を殺してしまったのか？ 彼は次のように語っています。彼は「今まで一度も逆らったことはなかったが、あの日は一瞬間の中が真っ黒になってやってしまった」と言っているのです。彼を凶行に走らせた母親の言葉とは、どのようなものだったのでしょうか。「24歳にもなって、仕事もしないで...」という一言でした。

なぜ、この言葉が凶行の引き金になったのでしょうか。彼は今まで母親に対して反抗的な態度を示したことのないあくまでいい子だったのです。彼は叱責されても、叱られても生返事を繰り返すだけで言葉を荒げたり、暴力を振るったりしたことはなかったのです。そのような彼だったのに、事件当日、母の一言によって積み重なった不満を爆発させてしまったのです。何気ないこの一言が引き金になったのです。彼は後でこの点について、次のように述べています。「ちゃんと大学も卒業し、就職した兄二人と比べられ、母親へのウッパンが溜まっていた。お母さんに叱られるとき、優秀な兄二人と比べられるのが一番嫌だった」と。もちろん、母親も彼がちゃんと大学に行くように、また卒業できるように、叱咤激励の意味で言ったのですが...たとえば兄二人は両方ともパチンコの店なんかに行ったことがないと言って彼をとがめたり、優秀な兄達と比較し、「恥さらし」という風に言って叱ったりしていました。もちろん、叱咤激励の意味で優秀な兄弟達と比較するということが少ないのですが、そのことが本人を傷つけるということがしばしばあるのですね。特に同性の兄弟の場合、顕著に現れます。一昨年、皆さんもよく御存知の若貴兄弟の確執

事件がありましたね。同性の兄弟というのはいくら仲がよさそうに見えてもやはりライバル意識というものを持っていますね。従って傷ついていた彼が母親の言葉をきっかけに、あるときキレて母親を殺害してしまったのです。

実はですね、「母殺し」が起こる家庭というのは多くの場合、「母子密着」の構造が認められます。母と子の結びつきが非常に強いのが特徴です。(稚内の事件略)

会津若松の事件

また2007年の5月に福島県の会津若松市で、県立高校の三年生が母親を殺害した事件がありました。この事件で特徴的なのは母親殺害後、本人が母親の首を持参して、母親を殺したと自首してきたことです。そのとき彼が言ったのは「誰でもいいから殺したかった。」です。(事件の詳細は略)

何が不可解かと言いますと、やはり「動機なき殺人」と言わざるをえない点だと思います。動機なき殺人という意味を解明するうえで、フランスの精神科医ジローが非常に興味深い仮説をたてています。一見動機が不可解に見える「動機なき殺人」の事例を仔細に分析すると、「悪(カコン)」を消すためにこのような殺人が実行されていることがわかるというわけです。悪すなわちカコンを抹殺しようとする衝動が意識されぬまま殺人という行為の動因になっているのだと説明しています。端的に言えば、このカコンを消そうとする衝動が攻撃性という形で表面化するのは、もちろんこの攻撃性が自分自身に向かう場合は自殺とか自傷行為になるということは理解できますね.....

現在、日本ではものすごく自殺者が増えています。年間自殺者数が3万人以上.....これだけ自殺者数が増えたのは1998年、この年に3万人を超え、以降ずっと高止まりの状態です。このように日本は自殺大国です。人口10万人当たりの自殺者数を比較すると、アメリカの2倍、イギリスの3倍です。また、中高生の特に女子に多い「リスカ」(リストカット)と言われる自傷行為も増えており、はやっているとんでもない過言ではありません。

ところが逆に、この攻撃性が他者に向かうときがあるのです。その場合を分析すれば、自らの内なる悪(カコン)を他者に「投影」して、それを消そうとするのです。この「投影」というのも皆さんの周りにも沢山発生しているのです。私が寄稿した雑誌「諸君」(2007.10)から引用すれば、「自らの内なる悪を外部的他者に『投影』して、その悪を消そうとするのである。『投影』とは、自分の内部にあることを認めたくない資質、衝動、感情、欲望などを、外部へ投げ捨て他者に転嫁しようとする心の働きであり、自らの過ちや欠点と同じものを他人の中に少しでも感じ取ると、激しく非難、攻撃するのも、この投影による。」と... 言いかえれば、自分自身の中にあるいやな受け入れたくないものを他者の中に認めると、それを激しく非難・攻撃することによって、あたかも自分自身には、その忌まわしいものがないかのようにふるまうことです。この投影ということは、

皆さんあまり意識されていないと思いますが、わりと日常的に行われているメカニズムです。それからもう一つのメカニズムもあります。一度投影したものが、再び自分自身に戻ってくるということです。すなわちブーメランのようにUターンしてくる場合があります。これが「被害妄想」ですね。実は被害妄想の場合はもともと自分の中にあったものを他者に投影し、そのまま自分に戻ってきた場合が多いわけですね。こういうふうに分の中の内なる悪（カコン）を投影される対象となるのは身近な親族（親、兄弟、子ども等）か、あるいは逆に全く面識のない第三者が多いと推測されるのですが、実際に動機なき殺人の被害者になるのもこのような人が多いのです。（以下中略）

まとめ

今まで述べてきた事例の共通項を挙げてみれば、第一に「親の過度の期待」、第二に「母子密着」になりやすいということ、第三に「父性の不在」ということが言えます。原因の一つは、少子化によって子どもの数が減少しているということ、したがって一人の子どもにかかる教育費も多額になり、どうしても期待をかけ、過保護・過干渉になりやすいのです。親は愛情だと思って色々なことをしていますが、逆に子どもにとっては親の期待に応えられないということが重圧になる場合もあるんです。それが典型的に現れているのが奈良の事件です。

親に期待をかけられ、多額の教育費を使ってもらっても、人間には持って生まれた能力があり、親の期待に応えられない子どもはやはり自分に能力がないことを痛感せざるをえません。そうするとどうなるかというと、自分自身の「自己愛」というものが著しく傷つきます。もう一つは核家族化という問題があります。この核家族にどのような現象が起こりやすいかというと、親の価値観・欲望だけを受容してしまうということです。また多くの家庭では父親が仕事などで忙しく、多くの場合母親だけの価値観、物差しのみを取り入れ、子どもは成長していくのです。したがって母親の欲望を充足しようと頑張るのですが、その中で挫折したり、窒息しそうなほど息詰まる状況になったりする場合もあるのではないかと考えられます。

それでは、このような状況の中で育ってきた子どもはどうなっていくのでしょうか。母子密着の中で母親の欲望、価値観、物差しだけを取り入れた子どもは、どうしても「自己愛的万能感」が強くなる傾向があります。母親の欲望を叶える自分でありたい.....

この「自己愛的万能感」は、幼児のときには持つことが許されるのです。すなわち2、3歳位のとき自分は何でもできる、自分は王様なんだという感覚です。なぜならば、子どもというのは親の希望を背負って出生してくるからです。言いかえれば親の自己愛を投影された形でこの世に生まれてくるのです。父親、母親、祖父母等それぞれができなかったことをこの子は叶えてくれるんじゃないかという期待を背負ってこの世に生まれてくるので

す。だから親の期待というのは実は自己愛の再生なのです。このことははっきりと認識しておいてください。

しかし成長するにつれて、現実というものが立ちふさがってくるのです。他者との比較で自分自身の身の丈というか、能力を知っていくのが思春期から青年期にかけてです。ところが、今の教育というのはわりと自己愛的万能感を後々まで持続させるような教育システムになっていますね。たとえば、公立の小・中ではあたかも皆が平等の力を持っているという考え方、^{みんな}皆やればできるのだというような考え方、もちろんこうした考え方は素晴らしいのですが..... ただこのような状況に自己が埋没していると、たとえば受験とか就職などの決定的なときに自分の身の丈を思い知らされてショックを受けるということが、非常に多いのです。ある意味で自分の身の丈を知ることは辛いことですが、徐々に本人が認識できるようなシステムを作ることも重要ではないかと思います。

それでは、今の子どもたちに何が起きているのでしょうか？ 自己愛的万能感が非常に肥大していますので、自己愛的イメージ及び自己愛をたっぷり投影した自分は何でもできるんだという意識が強く、現実の自分とのギャップが非常に大きいのです。このギャップを受け入れられない若者はどうしているのでしょうか。3つの選択肢があります。一番目は「ひきこもり」です。このひきこもりはある意味では防衛反応です。逃避という形での防衛反応です。なぜなら、自分の家にひきこもっていて、外に出ない限り、自分自身の自己愛は決して傷つかないからです。

二番目は「ストーカー」です。具体例を挙げれば、ある男の子がある女の子に好きだから交際してくれと告白したものの、女の子からは交際を拒否されたような場合です。そうされた男の子はその女の子の行き帰りに待ち伏せしたり、場合によっては部屋に忍び込んだりするのです。男の子はフラれると、自分の自己愛的イメージが傷つくわけですね。自分は異性に好いてもらえないような魅力のない人間だということに直面せざるをえないわけです。ところがその認知を拒絶するのです。どういうふうに拒絶するかと言えば、相手は恥ずかしがっているだけだ、本当は自分に気があるのに安く見られないように拒絶しただけだというわけです。このように認知をちょっと歪曲して理解することによって自分自身の自己愛的イメージが傷つくのを阻止しているのです。現在このような例は多くみられますね.....

三番目が「非行・犯罪」です。彼らはどうしているのでしょうか。自己愛的イメージと現実の自分との間には大きな開きがあります。そこで、そのようなギャップの根底にある社会的秩序を全部破壊してしまおうというわけです。奈良放火殺人事件に典型例を見ることができます。

この三つの選択肢、「ひきこもり」・「ストーカー」・「非行・犯罪」が今ものすごく増えているのは、やはり自己愛的イメージと現実の自分とのギャップがものすごく大きいからですね。したがって、このギャップをどのように埋めてあげるのか、また、子どものときから過保護に

「あなたは何でもできるのよ」というような幻想を与える教育というのはかえって本人にとって可哀な事態を生じさせるという気もするのです。今まで述べたことはこれから皆で考えていかなければなりません。

それからもう一つですね。「母子密着」の背景にあるのが、私がいつも言っている「父性の不在」ということです。強い父親を作ったらいいのではないかと誤解されやすいのですが、決してそうではないのです。ここで言っている父性というのは「極めて象徴的なもの」です。「象徴的な父性」として有名なのは、「モーセの十戒」です。汝殺すなかれ等の掟おきてというか、人間の欲望を規制するような象徴的秩序というのはどんな社会にあっても必要なものです。この象徴的父性というのか、掟おきてというのかのような形で伝えられたのかというと、家庭内の決まり、共同体の規範、社会秩序、法、理念、理想、伝統等です。現在の日本では明らかに社会全体がこの象徴的父性を否認する方向に向かっています。この流れはどういう形で現れているのでしょうか？ 象徴的父性を体現する規範、社会秩序、法等の失墜という形で表面化しているのです。結果的に規範意識の低下及び権威の拒否という形で現れてきます。このことは何も少年達に限ったことではなく、大人にも符合することです（防衛省の守屋事件、社会保

険庁の年金問題等）。少年達の規範意識の低下について述べてきましたが、このことは大人達の規範意識の低下を反映しているにすぎないのです。

このような状況の中で、今までご紹介してきましたような悲惨な事件が起こらないようにするにはどうすればいいのでしょうか。微力な私達ですが、考えていかなければならないのです。

やはり象徴的父性にく括られる社会秩序や規範をどのように取り戻していくかというのが一つの課題です。核家族化ということとも関連することですが、やはり共同体の規範というものは非常に重要です。読者の方も昔のことを思い出してください。子どもをその家族だけで育てていたわけではなく、村社会というものがあって、その中の大人全体が悪いことをしたら叱るというふうなシステムになっていました。たとえば他人の家の柿を盗んで食べた場合、近所のおじさんが怒るというシステムの中でこのようなことをしたらいけないということを習得していったのです。言いかえれば地域の共同体全体の中で子どもを育てていく姿勢が大切です。核家族の中で母親だけに子育ての負担を強いるのではなく、地域社会全体で子どもを育てていくという視点が極めて重要になってきているのではないかと思います。

情報 あらカルト

ユネスコ世界児童画展 & フォトコンテスト受賞作品展 同時開催！

日時：3月18日(火)～3月23日(日)
10:00～17:00(最終日は15:00まで)
会場：西宮市立市民ギャラリー 3階(西宮市川添町15-26)
ユネスコ世界児童画展
(主催：西宮ユネスコ協会、西宮市教育委員会)



市内の幼稚園、小学校に通う子どもたちと、姉妹都市をはじめとする外国の子どもたちが描いた絵画を一堂に展示します。絵画の交換を通して国際交流を図ります。(出展数約600点)

問合せ/人権教育推進グループ TEL 35-3892
平成19年度「家族の絆フォトコンテスト」受賞作品展
(主催：西宮市家庭教育振興市民会議、西宮市教育委員会)
今年で9回目。テーマを「家族の絆～わたしの宝物～」とし、H.19.7.17～9.14までの期間で作品を募集したところ、【一般の部】83名、【ジュニアの部】8名で158点(91名)の応募がありました。その中から受賞作品23点を展示します。

西宮市ホームページ(<http://www.nishi.or.jp/homepage/katei/>)でも掲載していますので、ぜひご覧ください。
問合せ/社会教育・文化財グループ TEL 35-3868

西宮市立郷土資料館の催し 今月のアラカルト 3月号「土人形」

開催中! 入場無料

日時：～3月30日(日) 月曜日休館)
10:00～17:00(入館は16:30まで)

会場：西宮市立郷土資料館常設展示室

展示内容：土人形は、兵庫県の郷土玩具の一つで、丹波地方の稲畑と但馬地方の葛畑の2箇所が主な生産地です。土人形のモチーフ(主題)には、大きく分けて 天神(菅原道真)「熊持ち金時」や「犬連れ金時」などの金時



もの 加藤清正や毛利元就などの武将もの 政岡や舞姫などの女もの 戎や大黒などの福神ものがあります。なかでも、天神人形や金時人形は、初節供を迎える子どもに祖父母や親類から贈る習慣があったことから、多く作られました。そのため流通範囲も広く、今も西宮市内に残っています。

今回は、当館所蔵の土人形と関連資料あわせて約20点を展示します。

問合せ/西宮市立郷土資料館 TEL 33-1298
〒662-0944 川添町15-26